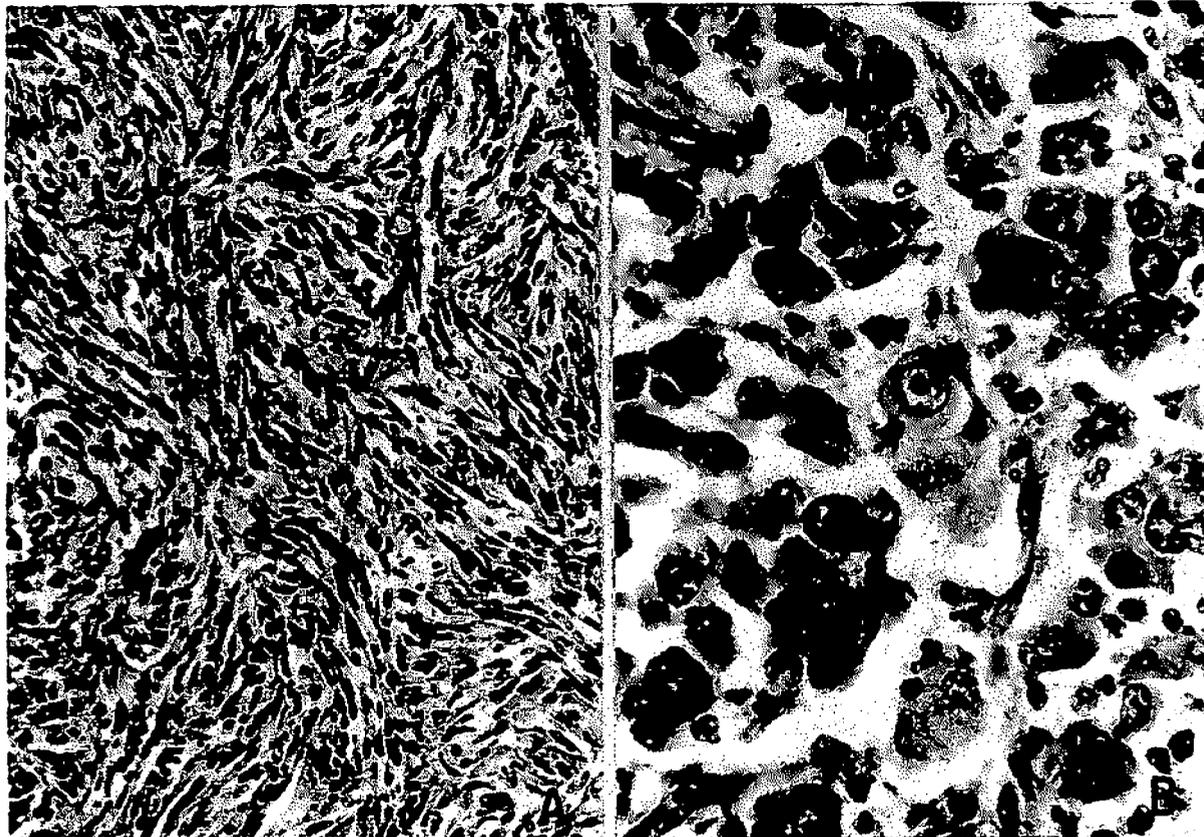


# 本土キツネにみられた悪性線維性組織球腫

日本獣医畜産大学病理学教室出題

第20回獣医病理学研修会標本No.336



動物：本土キツネ，雄，年齢9才，体重7 kg。

臨床的事項：1979年9月3日，左前肢第4指列先端に自壊を伴う鳩卵大の腫瘤を発見し，同年10月3日，腫瘤の切除を行った（提出標本）。この腫瘤の断面は黄白色の斑状を呈し，出血部も認められた。その後，左前肢全体に腫脹を認めるようになり，左頸部皮下にも4×3×3 cm大の腫瘤を触知するようになった。剖検2週間前から食欲が減退し，削瘦が顕著となり，同年12月22日斃死した。

剖検所見：左前肢腫脹部分の断面は，切除した腫瘤と同様に黄白色の斑状を呈し，筋肉は萎縮して深部の骨付近にのみ残存していた。肺の各葉にはほぼ均等に直径2～5 mmのかなり堅い白色結節が多数認められた。

組織学的所見：腫瘤部には様々な形態と大きさを示す多形細胞の腫瘍性増殖が認められた。その増殖形態により写真A(×100)のように細長い紡錘形細胞が線維性に増殖する部位と，写真B(×400)のように大小様々の遊離性細胞が主体をなす部位とに大別できた。写真Aは線維の流れが交錯して放射状を呈す，いわゆるストリフォームパターンを示す。このような部位では，膠原線維の増生が認められた。Bの部位に出現する細胞には電顕的にライソゾームや貪食像が確認され，組織球に類似した性格がうかがわれた。A・B両部位の所々には奇怪な形の多核巨細胞が出現していた。一般に腫瘍細胞は弱好酸

性の豊富な胞体を有し，数個の空胞を持ったり細かい泡沫様の変化を示すものもあった。核は淡明でその形態は多彩であった。横紋筋肉腫を疑い，PTAH染色とハイデンハインの鉄ヘマトキシリン染色を施したが，横紋はみだされなかった。また，電顕的にも筋肉由来を裏付けるような筋原線維は認められなかった。なお，肺と右腋窩部のリンパ節に転移病巣を認めた。

診断：悪性線維性組織球腫 Malignant fibrous histiocytoma。この腫瘍は悪性線維性黄色腫あるいは線維黄色肉腫とも呼ばれ，1964年に O'Brien と Stout により初めて報告されたが，1979年 Weiss と Enzinger に至りこの腫瘍の範囲は拡大され，ヒトにおける中高年の軟部肉腫の中では最も多い腫瘍として注目されるようになった。組織学的にはストリフォームパターンと呼ばれる線維性増殖像から未分化な多形細胞像まで変化に富み，類円形の組織球様細胞や多核巨細胞の出現を特徴とし，肺やリンパ節への転移が高度にみられるとされている。

本例においても1.ストリフォームパターンを伴う線維性増殖像がみられたこと，2.類円形の組織球様細胞や多核巨細胞が出現し多形性が顕著であったこと，3.腫瘍の増殖が急激で肺やリンパ節への転移がみられたこと，4.光顕的に横紋構造はみられず電顕的にも筋原線維がみられなかったことなどにより，Weiss や Enzinger のいう悪性線維性組織球腫の範ちゅうに入るものと診断した。